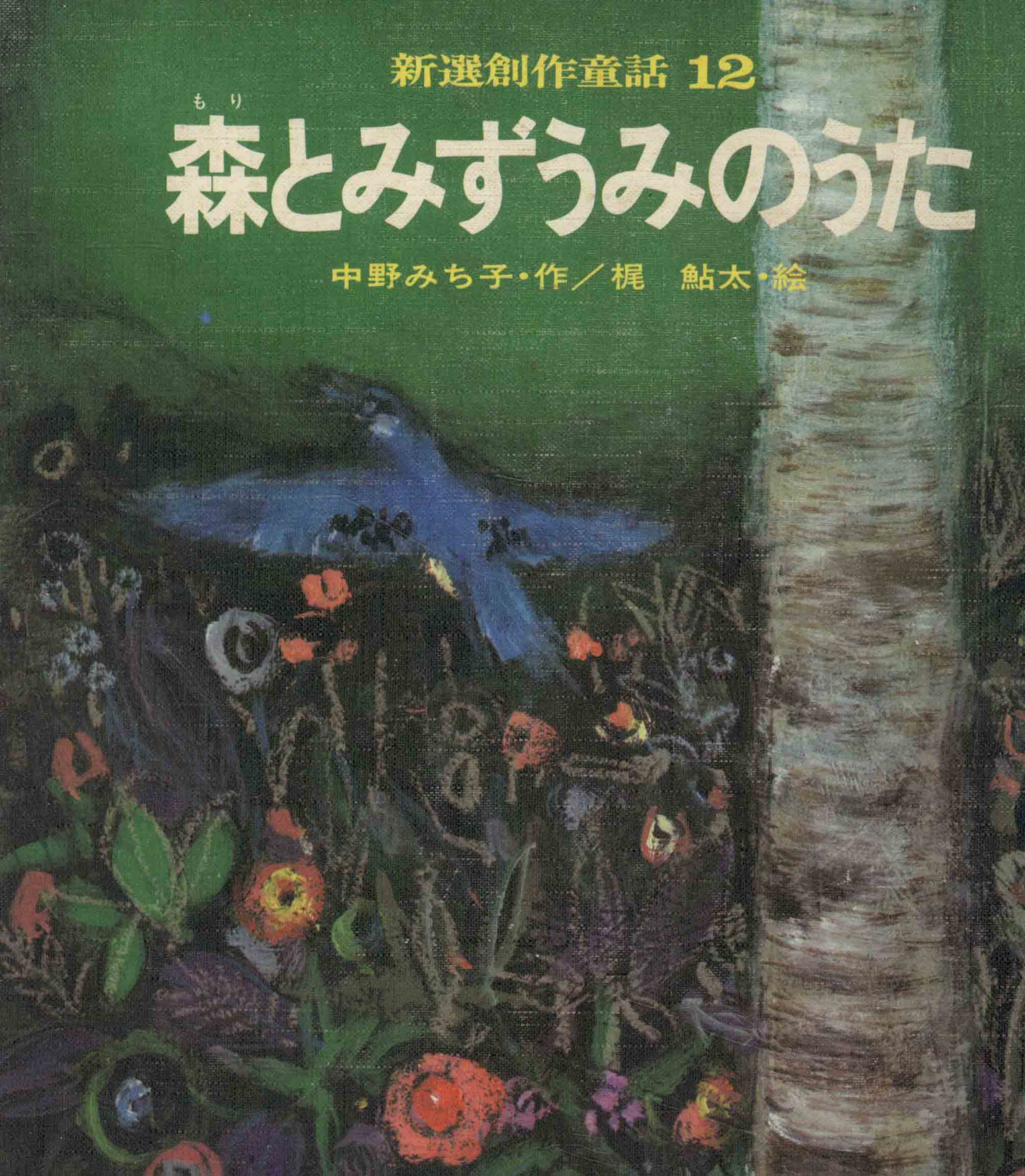


新選創作童話 12

も り

森とみずうみのうた

中野みち子・作／梶 鮎太・絵



著者紹介

なかの
中野 みち子

埼玉県熊谷市に生まれる。埼玉大学教員養成科卒業。児童文化の会同人。井野川潔、早船ちよ両先生に師事。現在、小学校の教師を続ける。『海辺のマーチ』などの作品がある。

現住所 〒174 東京都板橋区前野町4-28

画家紹介

かじ あゆ た
梶 鮎 太

1927年広島県に生まれる。1951年武蔵野美術大学油絵科卒業。長いあいだ高等学校の教師をしたのち新聞、雑誌やテレビなどのさしえの仕事に従事。主な作品に『子どものための伝記図書館』『孤島ひとりぼっち』『もしも原子がみえたなら』などがある。

現住所 〒164 東京都中野区東中野1-33-8

913

中野 みち子

森とみずうみのうた

国土社 1975

78P 21cm×19cm (新選創作童話 12)

基本カード記載例

◎新選創作童話 12 **森とみずうみのうた**

《検印廃止》

初版発行 1972年1月25日 5版発行 1975年9月10日 印刷 株式会社厚德社

*著者 ^{なかの}中野^こみち子 *発行者 長宗泰造 *発行所 株式会社国土社
東京都文京区目白台1-17-6 〒112 電話 (943) 3721(代) 振替 東京 90631

乱丁・落丁はおとりかえします

森とみずうみのうた

中野みち子・作

梶 鮎 太・絵





● もくじ

火^ひがながれて 4

よみがえる山^{やま} 13

シラカバのめばえ 21

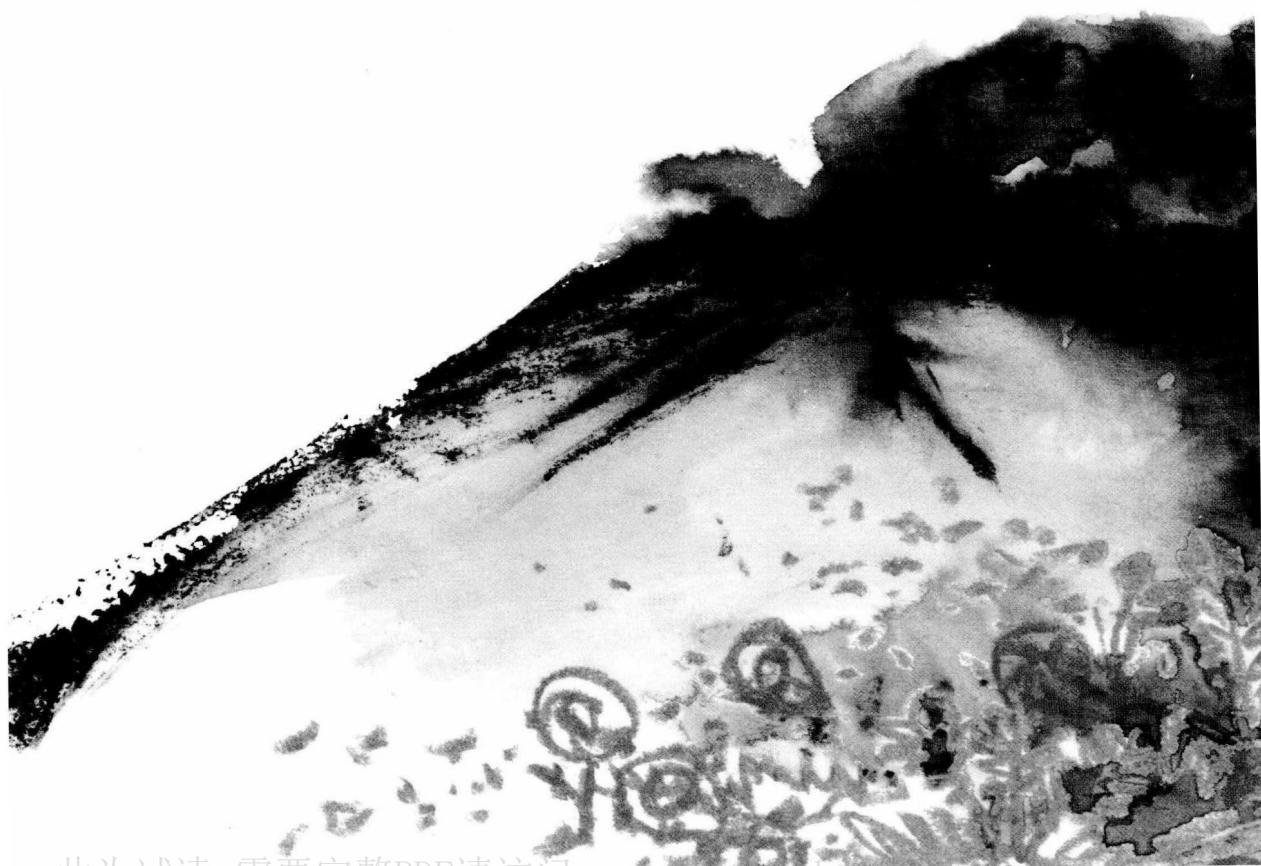
生^いきのこったシラカバ 28

あたらしいめばえ 38

はじめてのあらし 50

としおいたシラカバ 62

シラカバのさいご 73



火^ひが ながれて

山^{やま}おくの 青^{あお}い みずうみの そばに、火^か山^{ざん}が ありました。
火^か山^{ざん}は、長^{なが}い 長^{なが}い あいだ 火^ひを ふかず、ちよう上^{じよう}の 火^か口^{こう}から、
けむりだけを ほそぼそと はきつづけていました。

白^{しろ}い けむりは、ある日^ひは よこに たなびき、ある日^ひは まっすぐ
空^{そら}に のぼりました。

火^か山^{ざん}の すそには ミズナラの 森^{もり}が しげっていました。

森^{もり}より 上^{うえ}には ノリウツギや ヤシャブシの木^きが のび、もっと

高^{たか}くには コケモモや ススキが はえて 山^{やま}は ちゆうふくまで み
どりに つつまれていました。

山^{やま}に 春^{はる}が くると ヤシャブシの おばなが ほうけ、ススキや

コウゾリナが 雪ゆきの 下したから めを だします。

夏なつは 花はなです。

ノリウツギは 白しろく コウゾリナは きいろく 草木くさきは いっせいに
花はなを ひらきます。

そして、秋あきには 実みが みのり コウゾリナの わたげが とび、木き
の葉はは 赤あかや きに そまります。

葉はが ちって 冬ふゆに なると、山やまは まっ白しろい 雪ゆきに うまって け
むりだけが しずかに 天てんに のぼるのです。

そんな 山やまの すがたは まいにち みずうみに うつつていました。
こうして 山やまと みずうみに しずかな 月つき日が ながれました。

ところが ちかごろ この山やまに なにかが おこりはじめていました。
白しろく おだやかだった けむりが 黒くろくなり、ときおり はげしく
ふきあげました。





つぎの日も けむりは 音を たてて ふきだし、おまけに にぶく
地なりさえ するのです。

つぎの日、地なりは ますます はげしく ぐらぐらと 地面も ゆ
れました。

つぎの日も つぎの日も 地しんは いよいよ つよくなるばかりで
す。なにかが 火山の そこで わきかえっているのです。

そして その夜。とうとう 山は 火を ふきました。

天を つく まっかな ほのおの なかで、火が きらめき 火の玉
が 雨のように ふりました。ふん火は なんども おこりました。

天も 地も さけるような ごう音と いっしよに、黒雲と 火ばし
らが 空に つつたち、ふきでる 火の玉と ほうりおちる 火の玉が
ぶつかりあい いりまじり 火花を ちらしたのです。

ふきでた 火は、かがやき うずまきながら 山はだを はって、じ
りじりと ふもとへ むかつて ながれました。

鳥は なきさけび 虫や けものは 右左に にげまどいました。

木と 草は にげることが できず ながれる火の 下じきに なり
いっしゅんの ほのおと なって もえて しんだのです。

おそろしかった 夜が あけて、朝日が のぼったとき、山は むざ
んに やけただれていました。

みどりの ススキも ノリウツギも もちろん とびかう 虫も い
ません。

あるのは 火口から ふきだして 黒く ひえかけた ようがんと
そちこちに おちた 火山だんだけ。

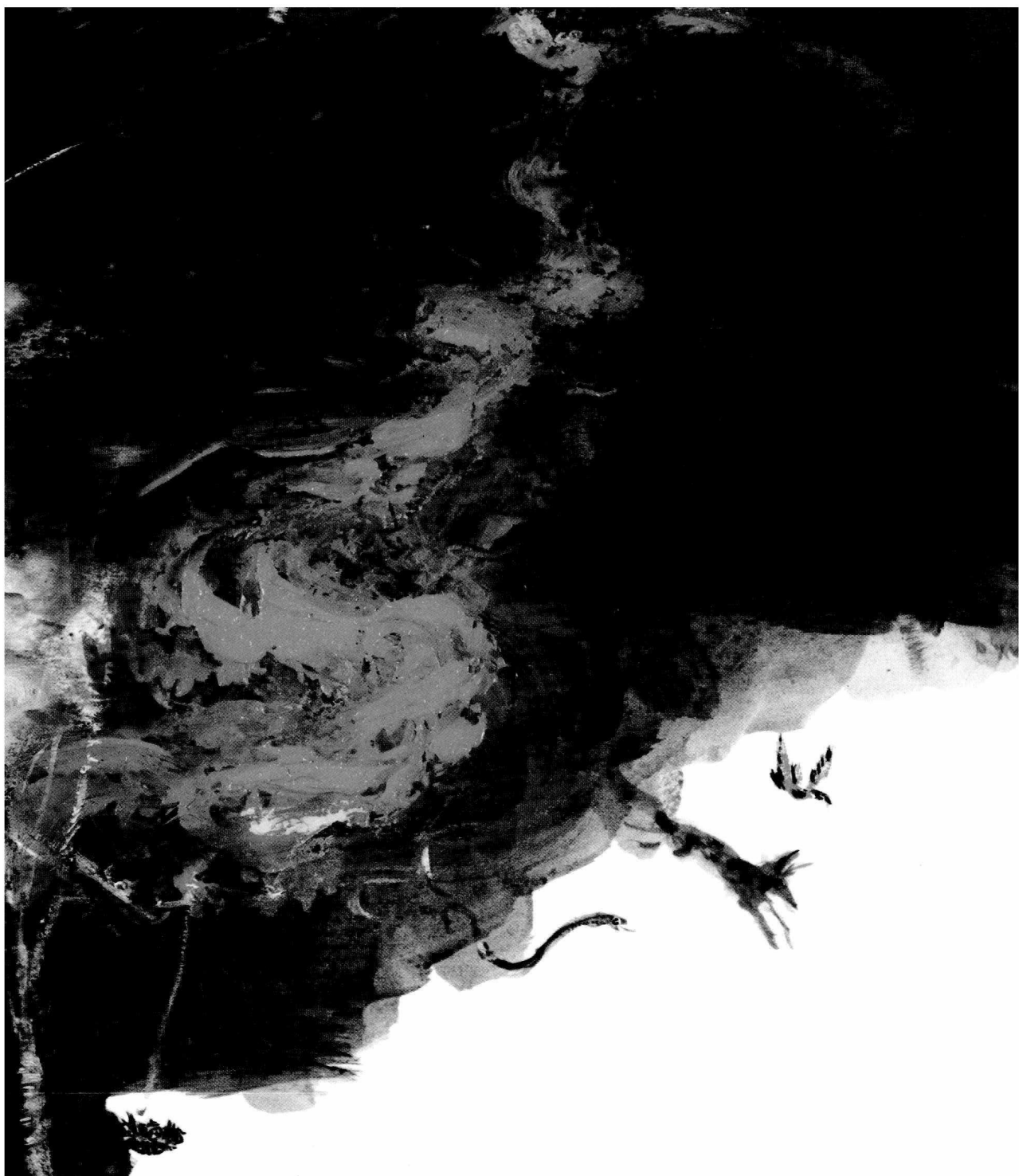
ふかい おそろしい しずかさが 山を つつんで いました。

山の 草木は しんだのです。

ふもとの 森の あちこちから まだ けむりが あがっています。

山火事です。 ふん火の 火が おちて 森が もえているのです。

みずうみにも その夜、かぞえきれないほどの 火山だんが おちま





した。

はげしい 地^じしんと ばくはつに みずうみも ゆれました。けむりは
ながれて みずうみの 上^{うへ}を はいました。

水^{みず}は、なん千^{ぜん}度の 熱^{ねつ}の 玉^{たま}に はげしく しぶきを あげ、ゆれわ
きかえたのです。

しかし いまは しずまって やけこげた 山^{やま}の すがたを さざな
みが ゆすっていました。

よみがえる 山やま

長いなが 月日つきひが すぎていきました。

雨あめは 山やまに ふり、風かぜと 太陽たいようと 水みずは、ふきでて ひえかたまつた

ようがんを すこしずつ くずしていきました。

岩いわだけの 山やまは、ひるま 日ひに てりつけられると あつくなり 夜よる

に なると きゆうに ひえきつてしまうのです。

あたためたり ひやされたりして もろくなった 岩いわに 風かぜは 砂すなを

たたきつけ、水みずは すこしの われめにも しみこんで 岩いわを こわし

ていきました。

岩いわが くずれて できた 砂すなのつぶは、雨あめに ながされて へこんだ

ところに たまります。

くぼちは いくらか 水^{みず}けを もちつづけられるようになりましたが、まだ 山^{やま}は 生き物^{もの}の すまない あれ地^ちでした。

このあれた山^{やま}に いちばん はじめに すみついた 生き物^{もの}は チイ でした。

ある 春^{はる}の日^ひ、チイの ほうしが あたたかい 風^{かぜ}に のって この 山^{やま}に とんできました。

黒^{くろ}っぽい 目^めに みえないほど ちいさな ほうしは 岩^{いわ}の しめつ た くぼみに おちました。

やがて 岩^{いわ}の 上^{うへ}に ぼちりと きみどりのものが みえてきました。 チイの めでした。

チイは、岩^{いわ}に しっかり しがみつ き 岩^{いわ}の 水^{みず}に とけている わずかな ようぶんを すうのです。

いかに つよい 植物^{しよくぶつ}とは いっても 水^{みず}けの すくない 岩^{いわ}の 上^{うへ}での くらしは つらいものでした。

つかれはてると しんだように ねむり、雨^{あめ}が ふったり、つゆが
おりたりするたびに 目^めを さまして、できるだけ 水^{みず}を すいました。
そうして、じぶんの 力^{ちから}で 生きていく ばしよを つくりながら
子どもを ふやしていきました。

ととった チイは かれ、かれた からだは 雨^{あめ}を すい、土^{つち}ぼこ
りを ためて 岩^{いわ}の 上^{うへ}に しめりけと ようぶんの ある ちいさい
あしばを つくったのです。

このあしばに どこからか コケの ほうしが おちてきました。

コケは チイが 岩^{いわ}の 上^{うへ}に ためてくれた ようぶんを もらって
大きくなりました。そして ほうしを、空^{そら}に むいて のびた ふくろ
に いっぱい つくって、つきつき あたらしい コケを めばえさせ
ました。

シダも ききました。

シダの ほうしは、しめっぽい コケや わずかの 土^{つち}の 上^{うへ}に お